

## アルナシームの引退に寄せて②

新馬戦の快勝後はノーザンファーム空港に移動してリフレッシュを図りつつ、成長を促すことになりました。2戦目はクラシックの登竜門と呼ばれる東京スポーツ杯2歳ステークスへ。しかも、続けて武豊騎手が乗ってくださることになり、我々にとって“こういう経験”がほとんどなかっただけに、レース当日が待ち遠しい反面、日に日に息苦しいような緊張感が高まっていきました。函館での滞在競馬であったデビュー戦とは打って変わって関西からの関東への輸送競馬ということもあり、懸念があったことは否定できません。体重は+20 kgと思惑通りに体が増えていたものの、テンションは高く、「宇宙人に連れ去られる」と言われたのはこのレースのパドックでの出来事です。



テンションを考慮してスタートはソロツと出していただき、折り合いに専念しましたが、ペースも落ち着いたこともあって我慢できずに最後方から一気に先頭へ。あの名手・武豊騎手があれだけ持っていかれてしまうのはほとんど見たことがありません。「ノーコントロールでした。良いモノを持っているのですが…」とコメントされたように、まさに制御不能でした。さすがに、直線半ばで失速してライバルに交わされましたが、落ち着いて考えれば、あれだけのレースぶりでありながら、あのイクイノックス号から 1.1 秒差に踏みとどまっていたのは能力の証と言えるでしょう。【暴走】、それはアルナシームにとっては切っても切り離せないワードであり、陣営の苦悩が始まった瞬間でもあります。多くのファンの方々から注目されるきっかけになったレースでもありました。オーナー、トレーナーともに意気消沈してしまったのは言うまでもなく、私も落ち込んで京王線に揺られたことを昨日のように思い出します。



「距離短縮をすべきかもしれません」とジョッキーからの進言もあったうえ、継続騎乗も可能とのことで、朝日杯の翌週に組まれている芝 1400mの万両賞へ向かう方向性となりました。しかし、その後、あらためて協議を重ねた結果、「一生に一度の舞台へ挑戦しましょう」ということになり、朝日杯への挑戦が決定しましたが、武豊騎手にはお手馬のドウデュース号がすでに出走を表明していたことから、残念ながら騎手は乗り変わることにあります。そこで、クセ馬を乗りこなすことに定評があり、大一番に強い池添謙一騎手で臨むことが決定しました。そして、厩舎では試行錯誤の日々が続き、調整法や馬具を見直すなど、懸命に取り組んでいただき、レースではメンコに加え、一時期はトレードマークになっていたクロス鼻皮を装着。素顔でのレースは東スポ杯が最後でした。そして、池添騎手もさっそく調教から連日熱心にコンタクトを取っていただき、折り合い面でも感触を掴んだとのコメントもあり、期待と不安が入り混じる中での挑戦です。レースでは大きく出遅れてしまいましたが、距離が短くなったとはいえ、暴走することはない、今後につながるレースができたと感じていましたし、「テンションに関してはゲート入りまで我慢してくれました。ただ、過去2戦が折り合い重視で出ているのではないぶん、出ませんでしたね。その口スが大きかったです。頭を上げるそぶりは見せましたが、暴走するところはありませんでした。直線は内に行くしかなかったのですが、伸びてくれましたし、力を見せてくれました。次につながるレースはできたと思います」と、内枠だったこともあって荒れた内側の部分を通らされてしまいましたが、勝ちに行ってくれたジョッキーは前を向きます。いつしか、一部ファンの間では、「アルしゃん、けんしゃん」と呼ばれはじめ、心の中では名コンビ誕生かと胸が躍り、年明け2月のつばき賞へ臨むことが決定。あらためて自己条件から出直しを図ることになりましたが、またしてもアルナシームと陣営に試練が訪れることになったのです。



とある2月の土曜日。当日はクラブ所属馬の出走がなかったこともあり、土曜日ながら休日で、とある地方で移動中でしたが、そんな中、橋口調教師からの着信が。この仕事をしていると、タイミングや時間などから、その電話が良い知らせなのか、そうでないのかがなんとなくわかるものです。おそらく、後者であろうと予測しながら応答すると、「再来週のレース、池添ジョッキーが乗れません…。ハイ、的中です。名コンビ結成と思ったのもつかの間で、池添騎手が騎乗停止の制裁を受けてしまったとの連絡でした。

次週に続く